

「今、私の晴雨計は！」④

われたためだ。

「イタリアで考えたこと

―滅びゆく村―

平山征夫

晴雨計の執筆が一月位間空いてしまった。先日漸く「品質保証書」を書いたが、別にサボっていたわけではない。先述のように八月終わりに初孫が誕生して少し孫に夢中になってはいたが、本当の理由は九月前半イタリア旅行に出かけていたためだ。さらに言い訳すれば帰国後は安本法制議論の国会での最終局面での動向が気になってしまったことと、授業（「地域経営論」という科目を後期に教えている）の準備に追

授業についていえば、本来は昨年で教授の定年に達したので学長の私もそのルールに従い授業は終了のはずだったが、代りが見つからなかったうえ、二年前の学部新設の際届け出たカリキュラムが文科省の四年間改訂出来ないという、分かったような分からないルールがあるのでやることになったもの。授業内容は全く融通無碍、地域づくりをはじめ経済・財政問題、地域政策論、環境問題などごった煮だが、日銀と知事の経験をベースに学生に「遺言的授業」が出来ることは幸福なことである。

ところでイタリアは「絶景の旅」と銘打ったツアーに参加したの

だが、悲願であったルネッサンスの先駆者ジョットのフレスコ画を見に行くのに、代表的壁画のあるスクロヴェーニ礼拝堂（パドヴァ）と、聖フランチェスコ教会（アッシジ）の両方を見られるツアーがこれだったからだ。ジョットの壁画は想像以上に荘厳で感動したが、旅自体は「健脚の旅」だった。その究極が「滅びゆく街チビタ」だ。ドラえもんに出てきそうな名前だが二五〇〇年前に山上に創られたこの街は、岩崩れで徐々に崩壊に向かっていて、下からの超急勾配の細い道でやっと繋がっているという村である。息をきらしてやっと登った山の上には教会も広場も住宅（殆ど空き家）もあり、かつて集落を形成し

ていたのが解るが、殆どの人は去ってしまい、今は二、三軒の土産物屋とレストラン、それと人の何倍もの猫の住む街となっていた。それでもガイドさんが五年前に来た時は六人だった住人は十人になっているそうだから、観光の仕事のお陰で人口は少し戻っているようだ。

この街を見ていると、紀元前から続いた街が間もなく滅びゆくことへの深い感慨に襲われる。そして現在日本で「地方消滅」危機が、さらに中国でも農村地域で過疎「空心村」問題が議論されているが、これらの村は将来どうなるのだろう……